様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月27日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530347
研究課題名（和文）　ヴオルガ・ドイツ人のドイツ移住とアメリカ移住――１９世紀末～１９９０年代
研究課題名（英文）　Immigration of Volga Germans to Germany and America ――from the end of 19th century to 1990s
研究代表者
鈴木　健夫（ SUZUKI TAKEO ）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：30063746

研究成果の概要（和文）：18 世紀末以降にロシア政府の誘致によりヴォルガ地方に入植したドイツ人移民は、19 世紀後半以降、そのかなりの数がドイツおよび南北アメリカ大陸に移住した。本研究では、当初彼らに与えられた特権が奪われた 1870 年代以降、ロシア化政策、反ドイツ主義、社会主義革命、飢饉、農業集団化、そして第二次大戦後のペレストロイカ・ソ連崩壊のなかでおこった上記の国外移住の時期、理由、量的推移、仲介団体、移住先、経済生活等を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Many of the Germans who immigrated to the Volga region under the invitation by the Russian government since the end of 18th century immigrated further to North America and South America since 1870s. In this study I clarified the periods, reasons, quantitative changes and intermediate bodies of their immigration. and new settlements and economic life in foreign countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野: 社会科学
科研費の分科・細目：経済学・経済史
キーワード：経済史、西洋史、移民、ヴォルガ・ドイツ人

１．研究開始当初の背景

ロシア・ドイツ人の歴史は長い間ロシア・ソ連史のなかに埋没しており、研究対象としてタブー視されてきたが、ペレストロイカ、ソ連崩壊のなかでそのタブーが解かれ、またロシア・ドイツ人自身

が彼らの人権・自治権回復運動や国外移住を通して歴史の表舞台に登場するなかで、その研究も徐々に活発化してきている。しかし、本格的な研究は 18 世紀末のロシア入植、ソ連時代のヴォルガ・ドイツ人自治共和国、カザフスタン・シベリアへの強制移住といったいくつかの対象に限られ、国外移住については、1990 年代以降のドイツ移住に関する若干の時事的研究はあるが、総括的ではなく、しかも現象の本質的理解に必要な社会経済史的検討はまだきわめて不十分である。

２．研究の目的

(1)　19 世紀末から第二次世界大戦まで、そして戦後とくにソ連崩壊から今日まで、ヴォルガ・ドイツ人はいつ、どのような理由で、どれだけの人数がドイツのどの地域に移住（脱出）して行き、そしてそこで彼らはどのような社会経済生活をして生きてきた、について解明する。

(2)　19世紀末からとくに1930年代までの期間にヴォルガ・ドイツ人はいつ、どのような理由で、どれだけの人数が南北アメリカ大陸のどの地域に移住（脱出）して行き、そしてそこで彼らはその後どのような社会経済生活をして生きてきたか、について解明する。

(3)　上記(1)と(2)の解明を通して、ロシア・ソ連および移住先の国々の歴史的事情を浮き彫りにし、従来の一国史的理解とは異なるロシア・ソ連の歴史社会像および移住先のドイツ、アメリカの歴史社会像に新たな光を照射する。そして、ソ連社会主義とは何であったのかという問題や人類にとっての移民一般の世界史的問題性を考察する。

３．研究の方法

(1)　ドイツ・南北アメリカ大陸各地に出張し、関連史料（移住当時の雑誌・報告書に掲載された記事・統計・論文等）・研究文献を収集した。出張した機関は、ドイツでは外国関係研究所図書館（シュトゥットガルト）、ドイツロシア人協会（同上）、東欧研究所（レーゲンスブルク）、北東研究所（ゲッチンゲン）、アメリカ合衆国ではコロラド州立大学図書館、フォート・コリンズ博物館図書室、ニューヨーク公共図書館、カナダではカルガリーのロシア・ドイツ人協会図書室、市立図書館、グレンボー博物館文書室、メンノ派歴史協会文書室、アルゼンチンではヴォルガ・ドイツ人協会（ブエノスアイレス）、コロニー（ブエノスアイレス州）の博物館。

(2)　ドイツ・アメリカ各地で現在生きる移住当事者およびその子孫に対して個々に同意を得た上で面接調査をした。

(3)　日本においての発注により関連文献を収集した。

(4)　以上のようにして収集した史料・研究文献・面接調査結果を分析した。

(5)　A・アイスフェルド氏（北東研究所長）やT. J. クロバーダンツ（ノース・ダコタ大学教授）等の専門研究者から貴重な助言を得た。

４．研究成果

(1)　ロシア・ドイツ人の第二次世界大戦前のドイツ移住の時期、理由、人数、仲介団体、受入等について基礎的情報および学問的認識を得た。ロシア化政策と反ドイツ主義、社会主義革命、飢饉、農業

集団化が主要な契機となり、移住実現には独ソの政治的関係が深く絡んでいたこと、牧師シュロイニングの生涯はこの移住の実態を体現していることが明確化された。

(2)　第二次世界大戦後とくにソ連崩壊後のドイツ移住について、時期、理由、量的推移、仲介団体、受入等について基礎的情報を得た。ロシア・ドイツ人協会の機関誌（Volk auf dem Weg）収載記事その他の研究文献から、ペレストロイカ・ソ連崩壊後のドイツ移住急増の実態を把握し、同時に、移住後の彼らの社会的統合をめぐる困難な諸問題（言語、就職等）を明確化した。

(3)　アメリカ合衆国およびカナダへの移住について、時期、理由、量的推移、移住先、社会経済生活について基礎的情報を得た。とくにアメリカ合衆国に移住したヴォルガ・ドイツ人は中西部の甜菜栽培・砂糖精製に従事し、その発展の中心的役割を果たしたことを明確化した。加えて、アメリカ合衆国在住のロシア・ドイツ人組織(American Historical Society of Germans from Russia)およびカナダ在住のロシアからの移住メンノ派の協会の長年の活動を把握した。

(4)　アルゼンチンへの移住について、時期、理由、量的推移、移住先、社会経済生活等について、諸種の新しい情報を得た。とりわけ5つのヴォルガ・ドイツ人コロニー（Hinojo, Nieves, San Miguel, San Jose, Santa Maria)の住民がどのように今日まで祖先の言語・生活文化を維持してきたかについて貴重な情報を得、また、1870年代後半の移住当初はヴォルガ地方で彼らの慣行となっていたロシア的な土地割替共同体（ミール）の土地利用制度を新天地でも維持したことを、それを実証する史料的記述から明確化した。

(5)　ドイツ移住については、論文のタイトルを「ヴォルガ・ドイツ人の祖国ドイツへの移住」とし、構成は「Ⅰ.歴史的概観――第一次世界大戦・大飢饉・農業集団化・ソ連邦崩壊、Ⅱ.第二次世界大戦前の移住、Ⅲ.ソ連崩壊後の大量移住、補論　牧師シュロイニングの生涯と活動」と定め、執筆を進めた。

南北アメリカ大陸への移住については、論文のタイトルを「ヴォルガ・ドイツ人のアメリカ移住」とし、構成は「Ⅰ.ロシア政府のロシア化政策、Ⅱ. アメリカ合衆国・カナダへの移住、Ⅲ.アルゼンチンへの移住」と定め、執筆を進めた。

上記いずれも研究期間内には三分の二程度の第一稿を書きあげており、完成に向けてさらに執筆を続ける。

(6)　本研究の成果の一部として論文「アルゼンチンに移住したヴォルガ・ドイツ人の共同体的生活：ヴォルガ地域から持ち込まれたミール制度」を完成させた。この論文は、2012年6月16日にAmerican Historical Society of Germans from Russiaの2012年度大会(ポートランド、コンコーディア大学）において報告（英文、報告集に掲載）し、2013年3月発行予定の早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書『「越境」世界の諸相：歴史と現在』(鈴木健夫編、早稲田大学出版部）に掲載する。

(7)　エカチェリーナ二世のドイツ人入植政策の立案にフランスの啓蒙思想家ディドロの提言が作用したことに言及し、またヴォルガ・ドイツ人の国外移住を生

じさせたロシアの社会構造に関連した報告（単独）「近代フランスにおけるロシア社会論」を大東文化大学経済研究所主催のシンポジウム「ロシア革命前における仏露関係」(2011 年 12 月 16 日)において行い、その要旨を同研究所『経済研究』第 25 号 (2012 年 3 月、1－6 ページ) に発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
1. Ｔａｋｅｏ　Suzuki, Communal Life among the Volga Germans in Argentina in the Early Years：“Mir” System brought from the Volga in South America, *Proceedings of a conference sponsored by the Center for Volga German Studies at Concordia University and presented in conjunction with the Annual Convention of the American Historical Society of Germans from Russia*, 14-17 June 2012 at Concordia University in Portland, Oregon, U.S.A. 査読無し(以下の学会発表の報告集掲載の論文)
2. 鈴木健夫「アルゼンチンに移住したヴォルガ・ドイツ人の共同体的生活：ヴォルガ地域から持ち込まれたミール制度」、鈴木健夫編『「越境」世界の諸相：歴史と現在』(早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書、2013 年 3 月発行予定)、査読無し。

〔学会発表〕（計１件）
1. Ｔａｋｅｏ　Suzuki, Communal Life among the Volga Germans in Argentina in the Early Years：“Mir” System brought from the Volga in South America, A conference sponsored by the Center for Volga German Studies at Concordia University and presented in conjunction with the Annual Convention of the American Historical Society of Germans from Russia, 16 June 2012 at Concordia University in Portland, Oregon, U.S.A.

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　健夫（SUZUKI TAKEO）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：30063746

(2)研究分担者

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：